春宵弓張月

後編 六

へ13
3692
12

門 へ13
號 3692
巻 12

曲亭翁原稿 西馬老人綴

東京書房
文昇堂熊谷梓

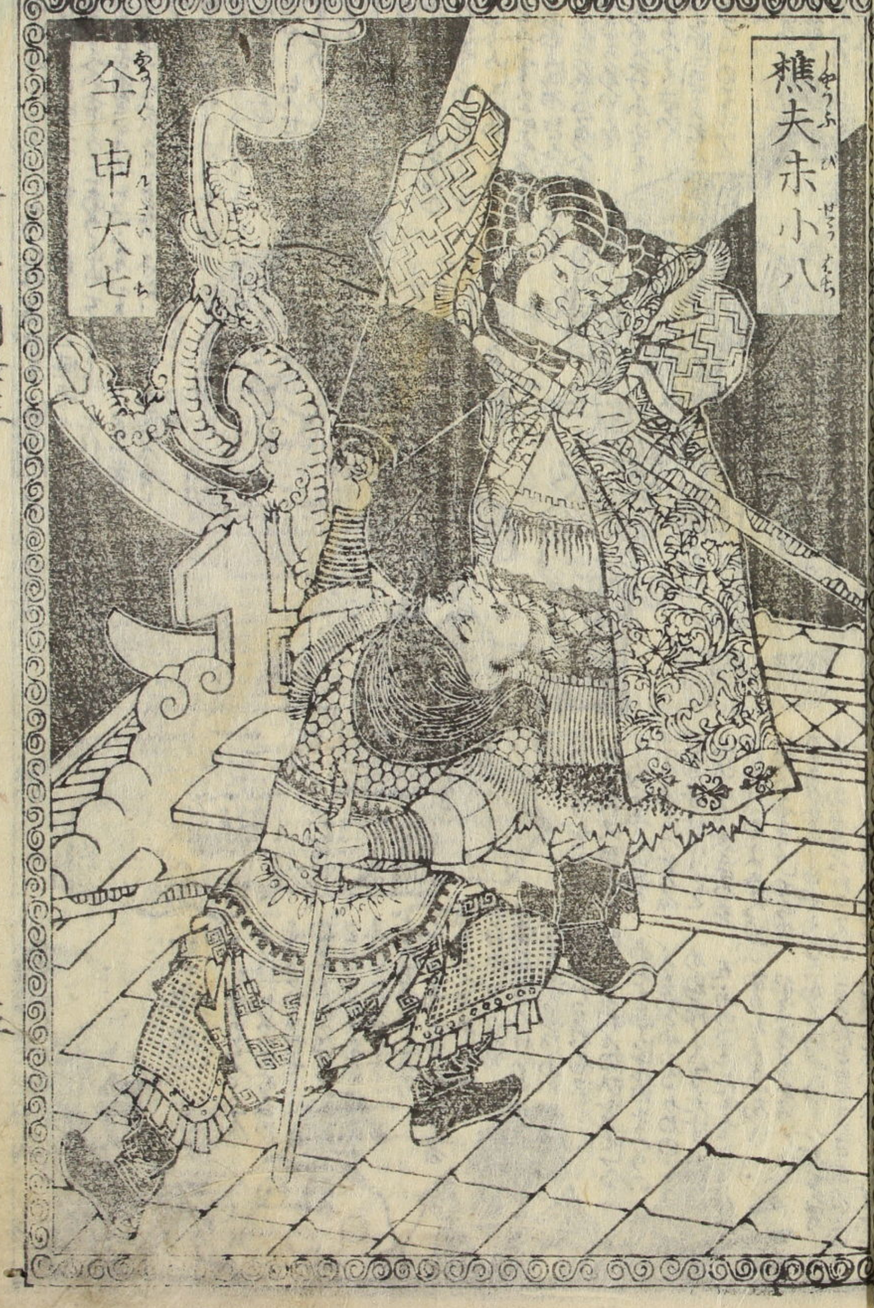
弓張月春之夕榮第廿三編序

夫此冊子を著作る故西馬が遺稿を以て。假名垣大人が校本と。此度僕が拙き遺續を。勸諭よろこばれて。その名〜乏し。先師計の二世乃樂亭。如此あるべくと猶遺る草稿ふ緣校せ〜二拾三篇。巻中たべて人間萬事この世塞翁が孫兒の孝子。鶴亀二士に出會て。暴欲不道の阿公が是迫募りし舊惡ゟ。善心ゟ變ず〜懺悔譚語を。拙き稗史と見侮たゞ。隨分已身の御用心あんぜんがてんくと。いらざる。お世話を本町庵ゞ。紋切形を受続て。

文久四稔 甲子春 二代の樂亭西馬述

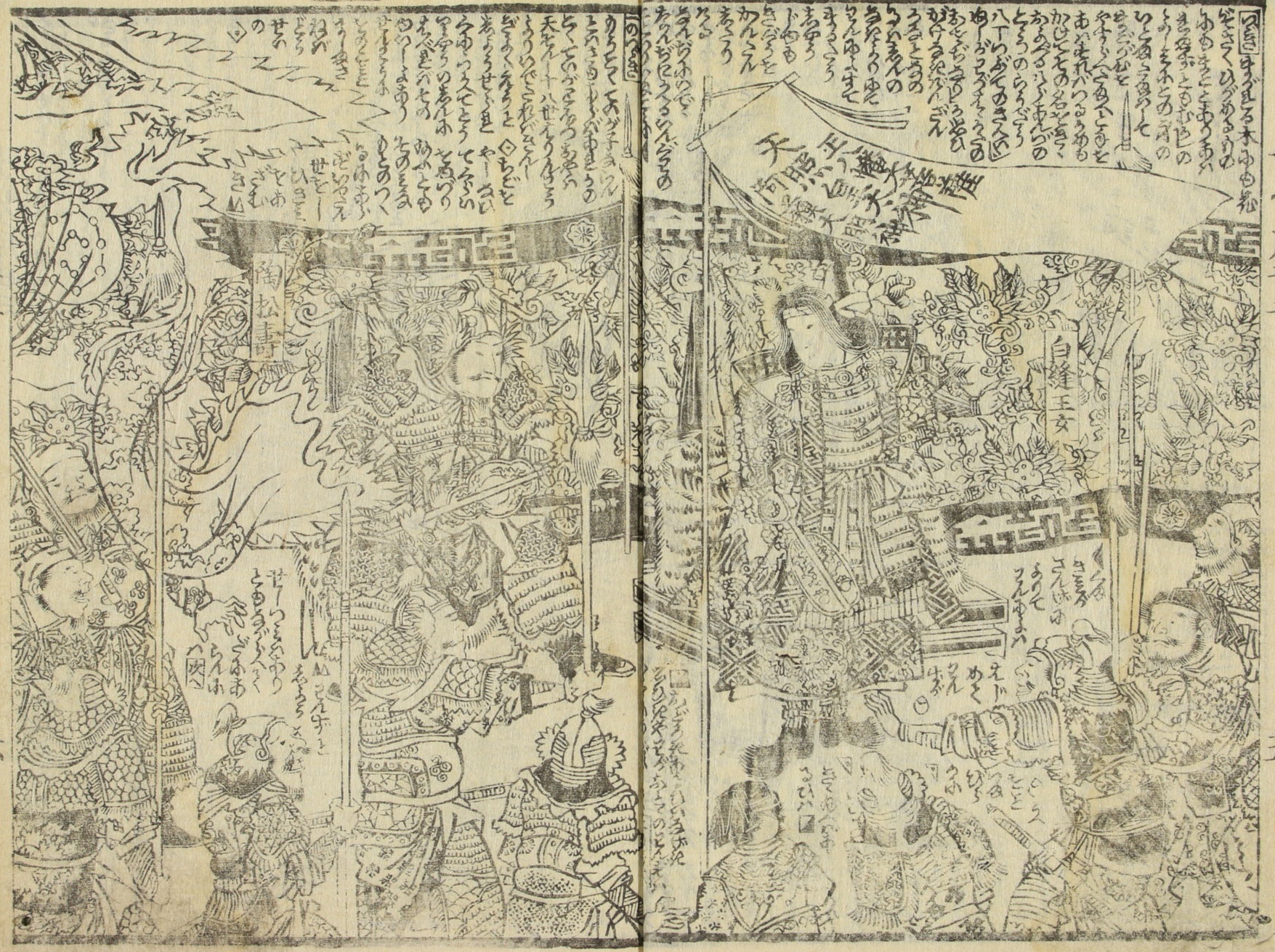
福禄寿仙
爲朝敵男御曾子舜天丸
猴人體雲

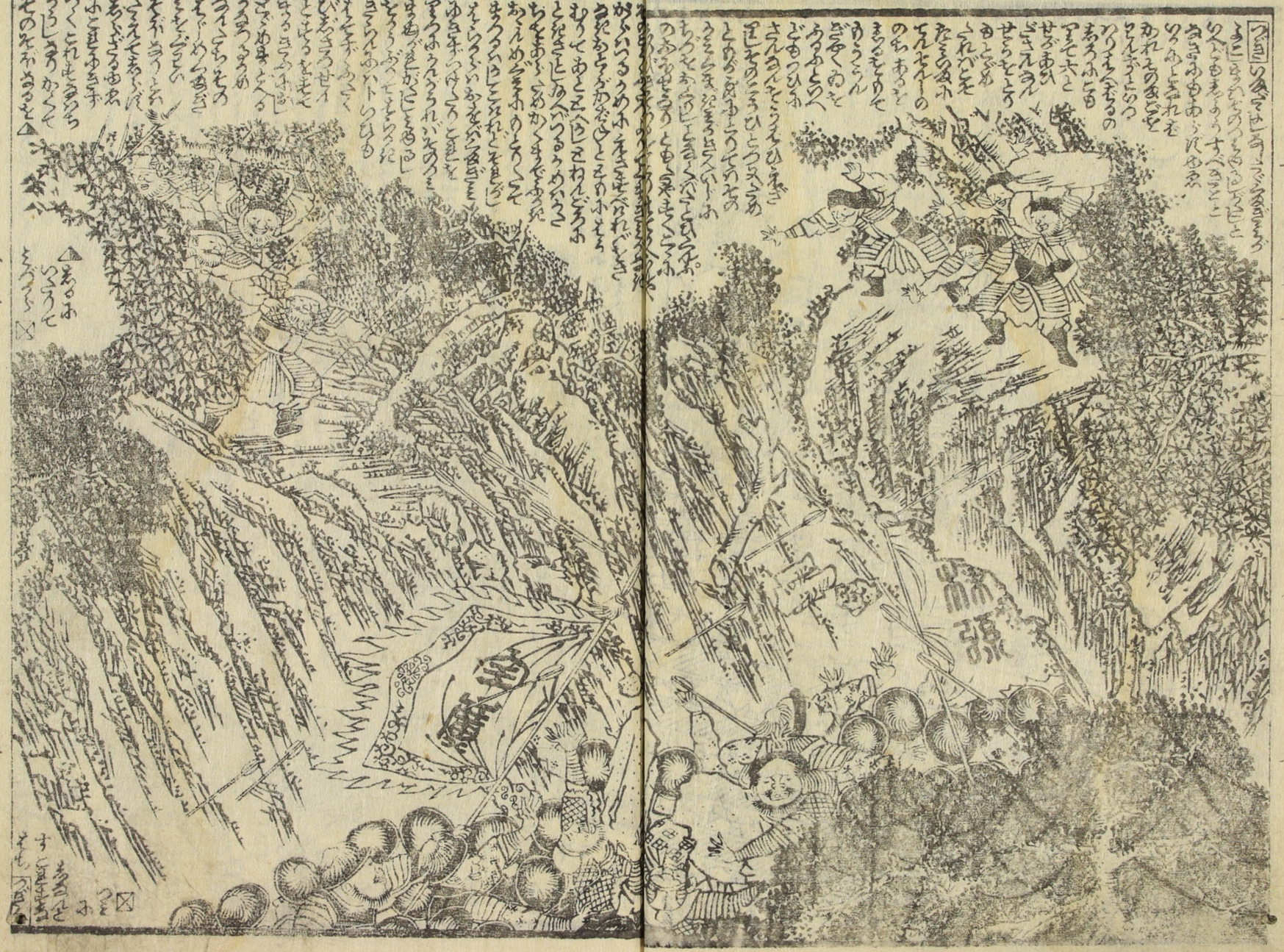
浦添大將
安司伯紀
浦添筬登之
珠鱗


樵夫赤小八
仝申大七

白縫王女
八郎爲朝
紀平次
舞天丸
松壽
かめ
つる

松寿
紀平次
つる
かえ
朝


白縫王女
陶松書



加免
紀平治
爲朝
辯天丸
つる
珠りん

紀平治
珠アん

曾我技合

西馬遺稿芳虎画

三の巻へ

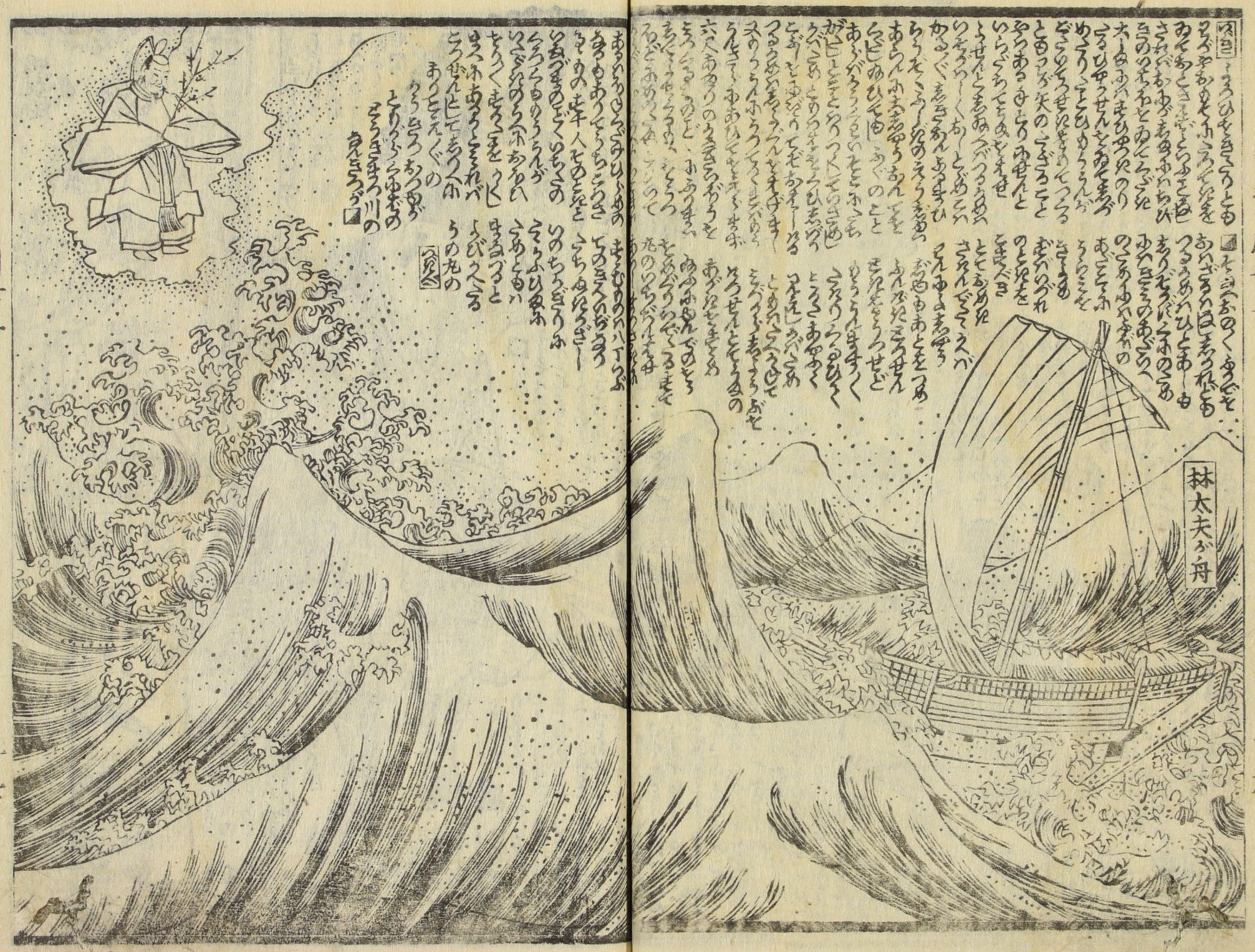
為朝
珠鱗
紀平治大夫

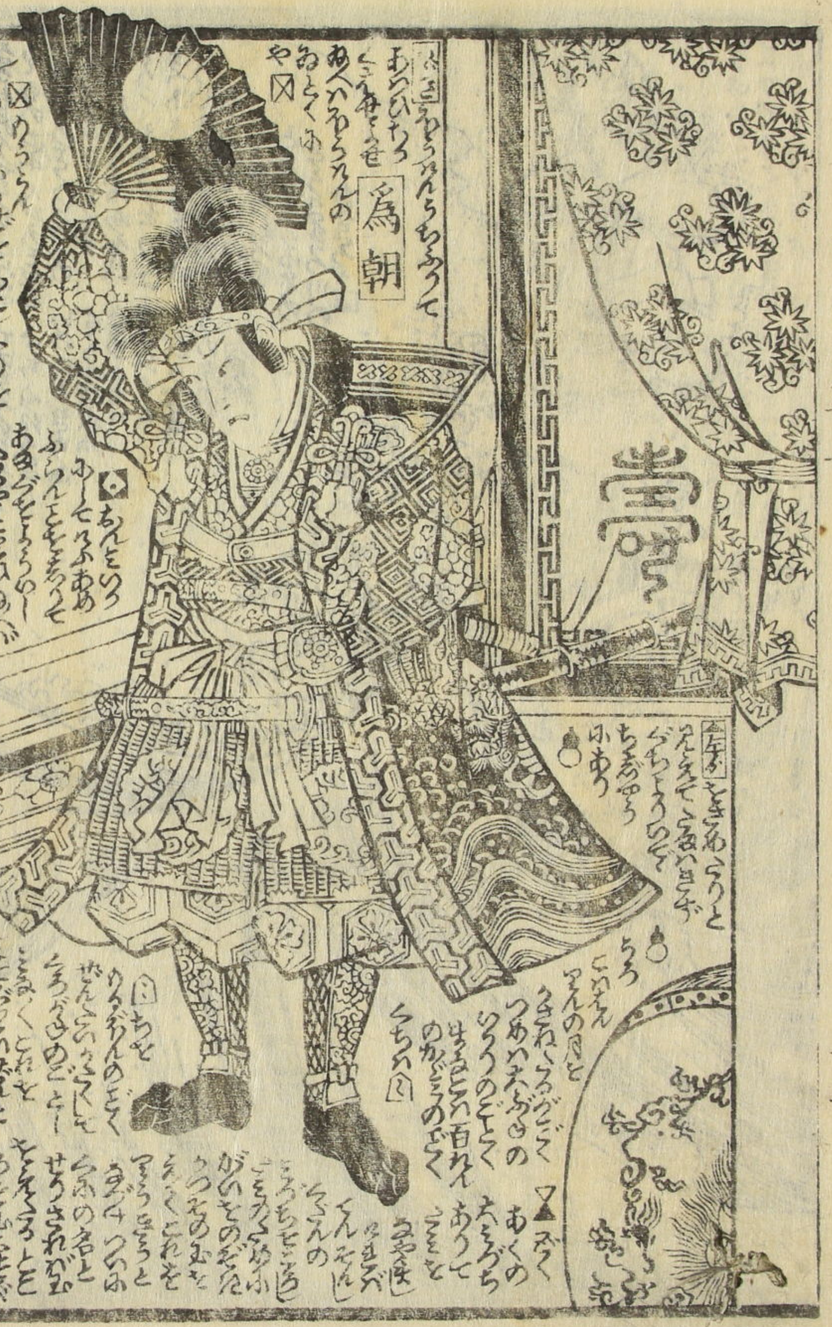
偽珠鱗

爲朝
伯紀

林大夫

林大夫
李蛇
島人


林太夫ぶ舟



為朝

林太夫

滕雲

嚇奮武者
鬨雲

弾天の陣

樂亭西馬遺稿　一猛齋芳虎画

光陰ハ矢の如ーと譬ふ引る弓張月も。既ふ初輯の當的より。陸続とーく十有余年。廿四編の大尾まで。更ふ空矢のるゥ。ーハ。曲亭翁ゥ錦嚢。ゥ。西馬子の大幸ふ。且板元の耳ッさぶ。彼蜀主ふや似ゥ生し。余小稗官の物数ゥ。ゥ。樂亭主人の遺稿を校ド。終ふ全部の今ふ至ゥ。目出度時ふ相生の。松の大樹の蔭ふ住居。實ふ恭平の御恩澤。仰ざゥめや歡喜ざゥゥや

慶應三丙寅　初春新鐫　假名垣魯文伏稟

一月主人笑幾回
相逢相値且銜杯
眼看春色如流水
今日残花昨日開
右唐詩
崔恵堂題

○大島二郎法師

○愛宕天王尊敦

寄鶴祝

ながきしなきを
よろこびいろこむ
千代をえて
田鶴の
ひさ敷

右詠
紀於呂香

○足利義兼

○大島太郎九為家

はらからも今朝
なつかしのけうぶきよ
鶴義はけらん
魯文
廣義の
注
盧
○為朝落胤
東原源太
○同
舎弟
西原
源次

林大夫
喜平治

王女

蒙雲
為朝
喜平治
かめ
つる
辟天九
王女
松壽

甲博
乙柏
南吉
紅術
東紀
堤造
丙烈

舟天丸

為朝

蒙雲

喜平治
馬朝
舜天丸
つる
王女
松寿

芳虎畫　魯文校訂

王女
為朝

松寿

つぎさ
るく
かめ
考朝
喜平治
王女
松壽

為朝
舞天丸

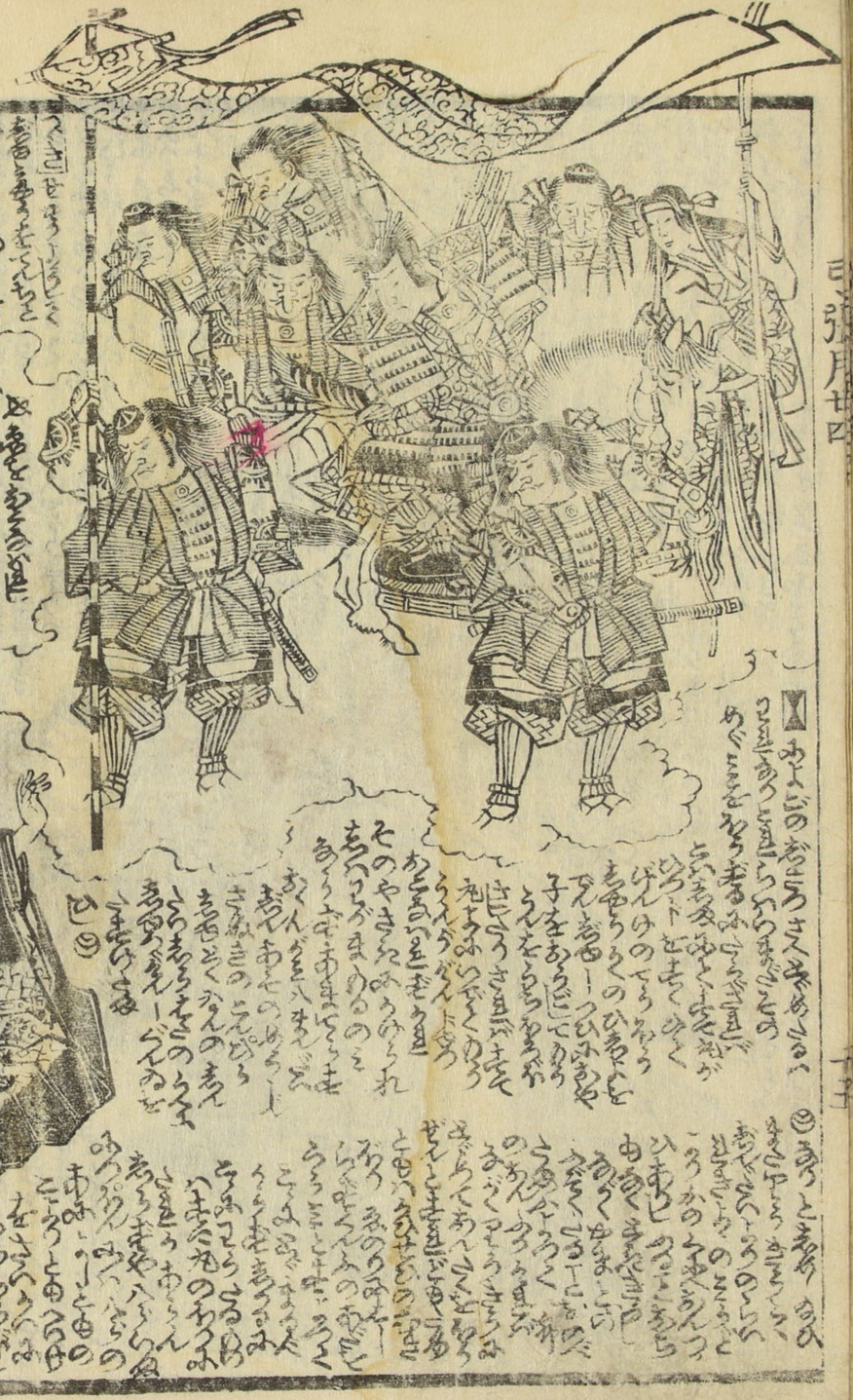
福禄寿仙

為朝

舞天丸

福禄寿仙

八丁亀
毛国鶴
松寿
喜平治
蛭天丸



為朝

義兼

太郎為家
足利義包

松壽
八丁角
林太夫
毛国鶴

辯天丸
紀平治

一孟齋芳虎画

八丈小島爲朝大明神鎮座

樂亭西馬遺稿

假名垣魯文校合